

ソシュール入門

人間がコトバをもつようになったのは、数万年前から数十万年前だとされているのに、文字が出てきたのは今から数千年前にすぎない。

紀元前一世紀のディオニュシオス・トラクスという文法家が、古典ギリシア語について書いた『文法術』という本の中に、「品詞」の分類が出てくる。

ヨーロッパでも「ポール・ロワイヤル文法」が出てくる。

アルノーとランスロという修道院が書いた『一般的理性的文法』という本の中に、コトバがもつ一般的なしくみのことが書かれている。

十八世紀の後半から十九世紀のはじめにかけて活躍したフンボルトは、コトバというのは、人間の頭の中にある創造的な能力なのだと、これを「エネルゲイア」と呼んでいる。また、いろいろな言語の特徴を決めるもとになっている「内的言語形式」と呼べるものがあるのだと言っている。

三つに分類した。「独立語」「膠着語」「屈折語」

「比較言語学」

コトバの本質とは何かという問題のことは、直接的には扱いません。先祖が同じであることが確実にわかっている複数の言語を比較して、その先祖に当たる言語はどんな特徴をもっていたのだろうか、ということ推測するのが、比較言語学の重要な目的。祖語でどういう音素が使われていたのかを推測することが、まず最初の目的。

ソシュールは、1857年に、ジュネーブに生まれる。

1879年『インド・ヨーロッパ諸語における母音の原初体系に関する覚え書き』

AとかOのような音を「ソナント係数」と呼んでいる。

比較言語学では、こういう音が祖語にあったのだと仮定して研究を進める考え方を「喉音理論」という。

ある言語で一つの音として働いている音声の集合体を、言語学では「音素」と呼ぶ。

祖語の文法はどうなっていたのだろうか？

祖語から分かれてできた諸言語が、どんな変化をしていったのかを明らかにすることも重要な目標になる。

文学作品中の単語についての研究は、ソシュールの「アナグラム研究」と呼ばれている。

「一般言語学」というソシュールが行った講義の内容を、ソシュールの弟子であるシャル・バイイとアルベール・セシエが、1916年に『一般言語学講義』という題目で本を出版した。

「ラング」

「日本語」とか「フランス語」のような個別の言語のこと。

「パロール」

同じ言語（ラング）でもいろいろと違った雑多な現れ方をした言語をいう。

誰もが同じものだと思う音の集まりのことを、ソシュールは「音素」と呼ぶ。音素に対応して、私たちの頭の中で作られる何らかの表象を「聴覚映像」と名づけた。

一定の音素の並びと一定の意味を結びつけるという、言語を使う人間の頭の中で行われる作用が、言語にとって一番大切な部分だと述べている。その一番大切な部分がラング。

単語を作っている音素も意味も、どちらも抽象的な性質をもっているということになるの
でして、だとするとなおさら、単語という単位をラングに含めるのが適当だということになる。

全体としてのコトバのことを「ランガージュ」と言っている。

人間が知覚するモノが意味を表している対象を、ソシュールは一般に「記号」と呼んだ。
音素列を「能記（シニフィアン）」、意味を「所記（シニフィエ）」と呼ぶことにした。

単語の能記と所記の間に何の関係もないという性質を、「言語記号の恣意性」と呼ぶ。

能記と所記の間にある程度の関連性が認められるような記号を「象徴」と呼んでいる。

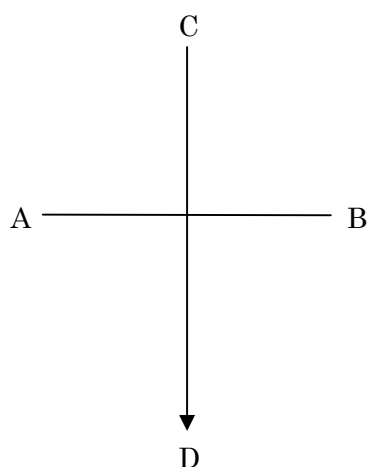
（言語が変わらないという性質を「不易性」、変わることができるという性質は「可易性」
などと呼んでいる。）

単語は一系列に並ぶという性質を「線状性」と呼んでいる。音素は必ず一系列にしか並べられない。

記号一般を対象とする学問の分野を「記号学」と呼んだ。

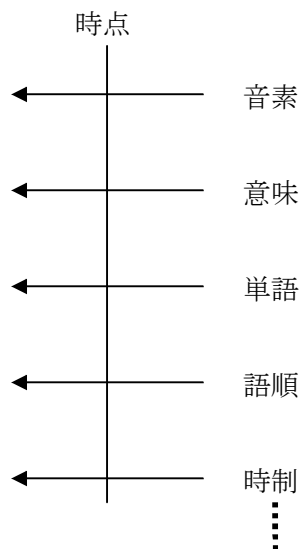
ある特定の時代における言語の状態を「共時態」と呼んだ。

日本語の「かなしい」という形容詞の意味が、「いとおしい」から「心が痛む」に変わったとかいうような、コトバを作っている個別的な要素の変化を「通時態」と呼んだ。



縦軸（CD）は時間の流れを表しています。（継起性の軸）

横軸（同時性の軸）は、音素とか意味とか文法とか、コトバのしくみを作っているいろいろな要素に対応していることになる。



まず大切なのは共時態の分析のほうで、通時態も大事だけれども、共時態に従属する立場にあると考えなければいけない。

「共時態」と「通時態」は独立しており、共時態の法則は「一般的」なのに、通時態の法則は「強制的」だという。

共時態と通時態に共通の法則を、「汎時的」な法則だと言っている。

P.182

ソシュールは、「ラングの中には差異しかない」と、かなり断定的に述べている。単語の意味や文法的な働きをきちんと分析するためには、問題としている意味や働きを表すいろいろな表現が、どんな体系を作っているのかを考えにいれなければならない。どんな体系があるのかをいつも念頭に置きながら、コトバの要素の性質をとらえるという方法は、ソシュール以降現代言語学に深く浸透した。ソシュールが現代言語学の創始者だと言われる第一の理由は、コトバに体系性があるという彼の指摘にあるのだ、と言っても過言ではない。

ソシュールは、ラングの中には「肯定的な」項目などない、と言っています。つまり、最初から意味がわかっている単語などないのだ、ということです。

要素の間に認められる関係として、「連合関係」と「連辞関係」という二つがあるのだと言っています。体系を作っている要素の間に認められる関係のほうは、「連合関係」（→デンマークの言語学者イエルクスレウが「範列関係」に変えた）。「連辞関係」は、動詞と目的とか、形容詞と名詞とか、並んで使われる単語の間にあるような関係のことを言う。

単語の能記についても連合関係は認められると言っている。

派生語や複合語で、能記と所記の間に見られる関係は、全く恣意的でも全く必然的でもなく、その中間ぐらいの恣意性の程度だということになります。ソシュールは、このような性質をもつ恣意性を「不完全な恣意性」と呼んでいる。

ソシュールはラテン語のような、恣意性が不完全になる程度の比較的高い言語を「文法的な」言語（「屈折語」）と呼び、中国語のような、恣意性の完全度が高い言語を「語彙的な」言語（「孤立語」）と呼びました。

お互いに並んで使われている間の関係が「連辞関係」と呼ばれる関係で、連合関係が、似ているけれども違う性質を持った要素の間にある関係なのに対して、連辞関係の場合は、もともと性質が違う要素同士の間に見られる関係。

下位の要素が並んで作られる上位の要素のことを「連辞」と呼んでいて、連辞関係という用語は、もちろんこれから出てきている。

複数の要素から成っている表現を使って聞き手に意味を理解してもらおうという、コトバの基本的な働きの仕組みをきちんと明らかにしようとするなら、使われている要素の間にどんな連辞関係があるのかを解明することが大切になる。

要素の間にある関係性を重視したソシュールの学説は、「構造主義」と呼ばれる。

ソシュールはコトバが表す内容のほうを「形相」、具体的な現象のほうを「実質」と呼んだ。